

总主编 谭晶华

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

日本古典文学作品选读

高文汉 编著



上海外语教育出版社
SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材
总主编 谭晶华



日本 古典文学作品选读

高文汉 编著

图书在版编目 (CIP) 数据

日本古典文学作品选读 / 高文汉编著.

—上海: 上海外语教育出版社, 2006

(新世纪高等学校日语专业本科生系列教材)

ISBN 7-5446-0043-2

I. 日… II. 高… III. 古典文学—作品集—日本—
高等学校—教材—日文 IV. I313.062

中国版本图书馆CIP数据核字 (2006) 第033216号

出版发行: **上海外语教育出版社**

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflap.com.cn

网 址: <http://www.sflap.com.cn> <http://www.sflap.com>

责任编辑: 应 允

印 刷: 上海浦东北联印刷厂

经 销: 新华书店上海发行所

开 本: 890×1240 1/32 印张 11.625 字数 352千字

版 次: 2006年9月第1版 2006年9月第1次印刷

印 数: 5 000 册

书 号: ISBN 7-5446-0043-2 / I · 0002

定 价: 16.00 元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材编委会

总主编：

谭晶华

编委：(以姓氏笔画为序)

- | | |
|-----|----------|
| 王 勇 | 浙江工商大学 |
| 王健宜 | 南开大学 |
| 叶 琳 | 南京大学 |
| 皮细庚 | 上海外国语大学 |
| 许慈惠 | 上海外国语大学 |
| 纪太平 | 厦门大学 |
| 杨拙人 | 广东外语外贸大学 |
| 严安生 | 北京外国语大学 |
| 吴 侃 | 同济大学 |
| 吴大纲 | 上海外国语大学 |
| 陈 岩 | 大连外国语学院 |
| 张 威 | 清华大学 |
| 陆留弟 | 华东师范大学 |
| 庞志春 | 复旦大学 |
| 胡振平 | 解放军外国语学院 |
| 修 刚 | 天津外国语学院 |
| 洪栖川 | 东北师范大学 |
| 高 宁 | 华东师范大学 |
| 高文汉 | 山东大学 |
| 宿久高 | 吉林大学 |
| 谭晶华 | 上海外国语大学 |

总序

21 世纪是一个国际化的高科技时代,也是一个由工业社会进一步向信息社会转化的时代。科学技术的高速发展、新兴交叉学科的涌现、人文文化与科学技术间的相互渗透和融合、社会的信息化以及知识、信息传播技术的日新月异加强了世界各国文化的交流、碰撞与合作。要想在激烈的世界竞争中立于不败之地,就要占领人才培养的制高点,培养出世界一流的高素质、高水平人才。

由于社会对外语人才的需求已呈多元化趋势,以往那种单一外语专业的基础技能型人才受到挑战。今后我们仍然需要培养《源氏物语》的专门研究家,但是高校外语专业的教学必须从过去的“经院式”人才培养模式向宽口径、应用性、复合型人才培养模式转化。社会要的不光是懂外语的毕业生,还需要思维敏捷、心理健康、知识广博、综合能力强的精通外语的专门人才。

我国的外语教学界已充分认识到,对国家建设发展急需的外语专业人才加大培养力度,提高其能力和素质是一项迫在眉睫的任务。随着我国日语专业教学点设置的不断增加和招生规模的逐年扩大,日语专业本科生的教学改革、学科建设及教材出版亦取得不小的成绩,各地先后出版了一批在全国有影响的优秀教材。正因为社会对日语人才的培养提出了更高的标准,同时对日语学科的建设也提出了新的要求,因此,日语本科生教材的编写和出版也应该顺应潮流,开拓创新。

我国外语教材和图书出版的基地、领头羊之一的上海外语教育出版社(外教社)以高度的责任感和高瞻远瞩的视野,在充分调研的基础上,抓住机遇,在 2003 年 8 月邀请了全国主要外语院校和教育部重点综合大学日语专业的近二十位专家,在上海召开了“全国高等学校日语专业

本科生系列教材编写委员会会议”。代表们完全认同编写“新世纪日语专业本科生系列教材”的必要性、可行性及紧迫性，并对编写立意、教材构建、编写审校程序提出了许多积极、中肯的建议和要求。之后，外教社又多次召开全国及上海地区专家学者会议，分头撰写编写大纲，确定教材类别、项目，讨论审核样稿。经过两年多的努力，终于迎来了第一批书稿的付梓。

本套教材共分语言知识、语言技能、语言学与文学、语言学与文化、语言学与翻译(中日对译)、人文科学、经济贸易、测试与教学法等若干板块，可以说几乎涵盖了当前我国日语专业所开设的全部课程。编写内容根据因材施教的原则，深入浅出，反映各个学科领域的最新研究成果；编写体例采用国家最新有关标准，力求科学、严谨；编写思想贯彻了在帮助学生打下扎实的语言基本功的基础上，培养学生分析和解决问题能力的原则，全面提高学生的人文、科学素养，使其养成健康向上的人生观，成为合格的外语专门人才。

本套教材编写委员会云集了我国日语界的学者专家，其中不少是高等学校外语专业指导委员会的委员。每一种教材均由编写委员会的专家们仔细审阅后确定，有的是从数种候选教材中遴选，总体上代表了中日语教材学发展的方向和水平。我们相信，外教社这套“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的编写和出版，一定会促进和提高我国日语专业本科教学质量的稳步提高，其前瞻性、先进性和创新性也将为日语教材的编写拓展更为广阔的视野。

谭晶华

上海外国语大学副校长

2006年5月

はしがき

本書は、主に大学生向きの教科書に適するように編著した。それに院生やその他の日本古典文学に興味のある方にも独学できるように心がけた。

本書は、四つの単元に分け、三十課からなっている。教科書として教授する場合、週に二時間の割合で、一学年が必要である。

学習者に日本古典文学を系統的に把握できるように、各単元に時代ごとの文学発展史、主な文学様式及びその特徴、代表的な作家とその作品などを概観した。作品選択の目安としては、韻文の場合、長歌・短歌・俳句並びに狂歌・川柳など、散文の場合、文芸論・訓読した漢文・物語・随筆・日記・紀行文・説話・浮世草子・読本など、各時代の主な文学様式や、並びにその美的精神、言語表現、思想内容などをあわせて考慮しながら、文学史における最も代表的な作品を選びすぐった。

各課は、本文・注釈・鑑賞・現代語訳・練習問題からなっている。鑑賞文は、掲載文を試みに批評した他、その作者及び作品全体の特色などについても適当に探求した。訳文はなるべく日本学者のものを引用したが、出所を明記しなかった分は、筆者自身が試訳した。間違った所、不適当な所が少なくはないと存じるが、皆様にご教示をお願いしたい。

なお、最終稿を国政政修先生に目を通していただいた。ここに深い感謝の意を表わす。

編著者 高文漢
2006年3月

第一單元 古代前期の文学	1
第1課 万葉の歌	3
第2課 古事記	21
第3課 風土記	31
第4課 日本靈異記	37
第二單元 古代後期の文学	44
第5課 古今和歌集	47
第6課 竹取物語	55
第7課 伊勢物語	71
第8課 源氏物語	79
第9課 堤中納言物語	89
第10課 本朝文粹	98
第11課 土佐日記	103
第12課 蜻蛉日記	119
第13課 更級日記	127
第14課 枕草子	142
第15課 大鏡	153
第16課 今昔物語集	164

第三单元 中世文学 176

- 第 17 課 新古今和歌集 179
- 第 18 課 中世の歌論 192
- 第 19 課 方丈記 203
- 第 20 課 徒然草 213
- 第 21 課 平家物語 232
- 第 22 課 太平記 247
- 第 23 課 中世の説話 257

第四单元 近世文学 266

- 第 24 課 近世の詩歌 269
- 第 25 課 芭蕉の紀行文 279
- 第 26 課 近世の文芸論 290
- 第 27 課 浮世物語 303
- 第 28 課 西鶴置土産 318
- 第 29 課 雨月物語 334
- 第 30 課 南総里見八犬伝 347

主要参考書目 360

第一單元 古代前期の文学

平安京遷都(794)以前の文学を古代前期の文学という。藤原京、平城京など、都がほとんど大和(奈良)地方にあったころの文学である。

日本は紀元前三世紀ごろ稲作農耕が始まり、弥生時代になると、その住人は大小の集落をなして定住し、次第に各地に氏族中心の小国家が形成されていった。やがて、それらも大和地方を根拠地とする勢力に併合、統一されて、倭王権が誕生した。そして、四世紀後半から朝鮮半島との交渉が盛んになり、七世紀には遣隋使、遣唐使らが活躍して、朝鮮や中国の文物、技術、制度が輸入され、国家体制の確立に大きな力となった。大化改新(645)を経て、律令体制がととのえられ、中央集権の律令国家としての大和朝廷が成立し、天皇の権威が絶対的になった。

政治体制が整備され、仏教や儒学をはじめとする大陸文化の受容が積極的に進められ、そうした中から、格調の高い飛鳥文化や白鳳文化が出現し、やがて奈良朝には絢爛たる天平文化が生み出された。

古代前期の文学は長期間口承文学であった。その原初は、「うたう」「おどる」「かたる」などが渾然と一体をなす未分化な状態にあったが、やがて、祭式や宗教的儀礼などにおける呪的な力を持つ祝詞、宣命や、農耕儀礼などにおける広い範囲の集団的な抒情歌である歌謡、さらに叙事的な語りの神話、伝説、説話などが分立して固有の表現を持つようになった。集団から生まれ、集団で保持されたものだから、口承文学の性格もおのずから非個人的で流動的であった。

大化改新以後、漢字を借りて日本文学の記載が可能になった。その使用と個性の自覚によって口承文学の勢力は次第に減少していった。個性の自覚が、個性的創作を生み、歌謡から派生した和歌は、独自の達成を遂

げ、やがて『万葉集』としてまとめられた。また中国文化の影響を直接に反映して漢詩文も盛んに作られるようになり、その結晶として『懷風藻』が誕生した。それに自国の独自性に対する認識が深められるにつれて、国家意識が高まってゆき、史書や地誌編集の気運が興った。それらは奈良時代初めになると、漢文体や漢字の音訓を使いこなした『古事記』『日本書紀』『風土記』に集大成されていった。

古代前期文学の特徴は、民族的に深く広い基盤を有する口承文学の比重の大きさと、生まれ出たばかりの若々しさと成熟の美しさを備える個性的抒情詩の隆盛にある。特に、その時代の記載文学は、すべて貴族的官僚の手で編集されたものでありながら、広く庶民の心と姿を温存し、後世文学が常に省みるべき諸源泉を湛えている。当時の官僚貴族は国家建設期の積極的な意欲を保持し、生産的現実と人間性から離れていなかったからである。

第 1 課 万葉の歌

1. 雄略天皇^①の歌

籠(こ)もよ み^②籠持ち ふくし^③もよ みぶくし持ち この岡に菜摘
ます^④児^⑤ 家聞かな^⑥ 名告(の)らさね^⑦ そらみつ^⑧ 大和の国は お
しなべて^⑨ 我こそ居れ^⑩ しきなべて^⑩ 我こそいませ 我こそは 告ら
め 家をも名をも

注 釈

- ①「雄略(ゆうりやく)天皇」:中国の『南史』『宋書・夷蛮伝』などの史書が伝える倭王武に当たると推定。
- ②「み」:美称の接頭語。
- ③「ふくし」:木、竹製のへら。
- ④「す」:尊敬の意の助動詞。動詞(四段・ナ変・ラ変)の未然形に付く。
- ⑤「児」:娘。呼びかけた表現。
- ⑥あなたの家のありかを聞きたい。「な」は奈良時代の終助詞。活用語の未然形に付き、話し手自身の願望を表す。
- ⑦あなたの名前を告げてほしい。男が女に名や家を尋ねることは求婚の意。女がそれを明らかにすると、結婚を承諾したことになる。「ね」は終助詞、活用語の未然形に接続して、他者の動作、行動に対する願望を表す。
- ⑧枕詞。「大和」にかかる。枕詞は和歌の修辞法の一つ、特定の語の上にかかって修飾または口調を整えるのに用いる。普通は五音以下。
- ⑨押しなびかせて。以下は歌手の威力を主張した表現。
- ⑩「こそ」:係助詞、いろいろの語に付き、その語を取り立てて指し示し、文意を

強調する。文末の活用語を已然形で終止させる。

①「しきなべて」(動詞「敷き靡ぶ」の連用形+接続助詞「て」):隅々まで領有して。

2. 舒明天皇^①の歌

天皇(すめらみこと)、香具山^②に登りて
国見したまふ^③時の御製歌(おほみうた)

大和には 群山(むらやま)あれど^④ とりよろふ^⑤ 天の香具山 登り立ち
国見をすれば^⑥ 国原は 煙立ち立つ^⑦ 海原^⑧は かまめ^⑨立ち立つ
うまし国ぞ^⑩ あきづ島^⑪ 大和の国は

注 釈

- ①「舒明(じよめい)天皇」(593—641):天智、天武天皇の父。万葉時代最初期に位置。
- ②「香具山(かぐやま)」:奈良県橿原(かしわら)市の東部にある山。畝傍(うねび)、耳成(みみなし)とともに、大和三山といわれる。
- ③ 高所から四方を眺め、国土を視察すること。もともと、豊作を願う儀礼として各地で行われたらしいが、後に国家行事となった。「たまふ」は補助動詞、尊敬の意を表す。
- ④ 多くの山々があるけれども。「ど」(接続助詞)は活用語の已然形に付いて、逆接の確定条件を表す。～けれども。～のに。
- ⑤ 語義未詳。とりわけ美点を備えている意だろう。
- ⑥ 国見をすると。「ば」(接続助詞)は、活用語の已然形に付いて、順接の確定条件を表す。
- ⑦「煙(けぶり)」:民の生活の豊かさを象徴。「立ち立つ」はあちこちに立つさま。
- ⑧ 香具山周辺には埴安(はにやす)池、耳成池、磐余(いわれ)池があった。その水面を指す。
- ⑨「かまめ」:かもめ、ゆりかもめなど。

⑩ 素晴らしい国だ。「そ」(終助詞):強く断定する。

⑪ 枕詞。「大和」にかかる。

3. 額田王^①の歌

熟田津^②に船乗りせむと^③月待てば潮もかなひぬ^④今はこぎ出でな^⑤

注 釈

①「額田王(ぬかたのおほきみ)」:万葉初期の代表的な女流歌人。初め大海人皇子に寵され、後に天智天皇と結婚。

②「熟田津(にきたつ)」:伊予国(愛媛県)道後温泉付近にあった船着場。

③ 船に乗って出立しようと。「む」(助動詞):活用語の未然形に付き、意志を表す。

④「ぬ」(助動詞):活用語の連用形に付き、新たな状態が発生したことを表す。
～てしまっている。～た。

⑤「な」(終助詞):動詞の未然形に付き、聞き手を誘う意を表す。～うよ。～ようよ。

4. 柿本人麻呂^①の歌

柿本朝臣人麻呂、妻の死にし後に^②、

泣血哀慟して作る歌、

あわせて短歌

天飛ぶや^③ 軽(かる)^④の道は 我妹子(わぎもこ)が 里にしあれば^⑤
ねもころに 見まく欲しけど^⑥ やまず行かば 人目を多み^⑦ まねく行
かば 人知りぬべみ^⑧ さねかづら^⑨ 後も逢はむと^⑩ 大舟の^⑪ 思ひ頼
みて 玉かぎる 磐垣淵の^⑫ 隠(こも)りのみ 恋ひつつあるに^⑬ 渡る
日の 暮れぬるがごと^⑭ 照る月の 雲隠るごと 沖つ藻の^⑮ なびきし
妹は 黄葉(もみちば)の^⑯ 過ぎて去にきと^⑰ 玉梓(たまづさ)の^⑱ 使ひ
の言へば 梓弓(あづさゆみ)^⑲ 音に聞きて 言はむすべ せむすべ知ら

に^① 音のみを 聞きてありえねば^② 我が恋ふる 千重の一重も 慰も
る 心もありやと^③ 我妹子が やまず出で見し 軽の市^④に 我(あ)が
立ち聞けば 玉だすき 畝傍の山に 鳴く鳥の^⑤ 声も聞こえず 玉梓(た
まほこ)の^⑥ 道行き人も ひとりだに^⑦ 似てし行かねば すべをなみ
妹が名呼びて 袖そ振りつる^⑧

短歌^⑨二首

秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道(やまち)知らずも^⑩
黄葉の散り行くなへに^⑪玉梓の使ひを見れば逢ひし日思ほゆ

注 釈

- ①「柿本人麻呂(かきのもと)のひとまる」:持統天皇の時代の下級官人として、行幸に従っての賛歌や、皇子皇女たちの死を悼む公的な挽歌を多く作った。万葉最大の歌人だが、生没年、経歴などは未詳。
- ②妻の死んだ後に。この「妻」は隠(こも)り妻か。「し」は助動詞「き」の連体形で、話し手の体験に基づく回想を表す。～た。
- ③枕詞。「軽」にかかる。
- ④奈良県橿原市。軽神社がある。
- ⑤わが妻の(住む)里なので。「し」(副助詞)は、上の語を指示し、強調する。「にあり」は断定の助動詞「なり」の連用形にう変動詞「あり」が付いたもので、「～だ」「～である」にあたる。「ば」(接続助詞)は、活用語の已然形に付き、「～ので」「～から」の意。
- ⑥見たいと思うけれども。「見まく欲し」は形容詞、下の「け」は奈良時代に用いられる形容詞の已然形、「ど」は逆接の確定条件を表す。
- ⑦人目が多いので。「み」(接尾語)は、形容詞の語幹に付き、原因を表す。多く「名詞+を+形容詞の語幹+み」の形を取る。～ので。～から。
- ⑧人が知ってしまいそうだから。「ぬ」(完了の助動詞)は、動詞の連用形に付き、～てしまっている。～た。「べみ」は推量助動詞「べし」の語幹「べ」と、原因を表す接尾語「み」からなったもの。
- ⑨枕詞。「後も逢ふ」にかかる。

- ⑩ 後にでも逢おうと。「む」(推量の助動詞)は、動詞の未然形に付き、意志を表す。
- ⑪ 枕詞。「思ひ頼む」にかかる。
- ⑫ 「玉かぎる 磐垣淵(いはかきふち)の」:序詞。「序詞」は、枕詞と同じ働きをするが、4音、5音などの1句からなる枕詞とは異なり、2句ないし4句にわたる。さらに「玉かぎる」は枕詞。全体の意味としては、「磐垣の取り囲む薄暗い川縁で」。人知れぬ恋の重苦しい思いに結びつけた表現。
- ⑬ 恋続けていたところ。「に」(接続助詞)は偶然的条件を表す。～たところ。
- ⑭ (空を)渡る太陽が暮れたように。「ごと」は、比況助動詞の連用形。～ように。
- ⑮ 枕詞。「なびく」にかかる。
- ⑯ これも妻の死の比喻表現。
- ⑰ 死んでしまったと。「去(い)ぬ」は「死ぬ」の意。「と」は、後の「言へば」に照応、使者の言う内容を表す。
- ⑱ 枕詞。「使ひ」にかかる。使者が妻の死を報じてきたのである。
- ⑲ 枕詞。「音」にかかる。この「音」は音信、知らせ。
- ⑳ 知らず。知らないで。「に」は助動詞「ず」の古い連用形。
- ㉑ じっとしていられないので。「え」は「得(う)」の未然形。「ね」は打消しの助動詞「ず」の已然形。
- ㉒ あろうかと。「や」は文末に付き、疑問を表す。
- ㉓ 「市」:交易のために人々が集まる場所。喧騒な「市」と「鳴く鳥の声も聞こえず」との静寂さに好対照。
- ㉔ 「玉だすき…鳴く鳥の」:序詞。実景と見る一説もある。「玉だすき」は枕詞。「畝傍」にかかる。
- ㉕ 枕詞。「道」にかかる。
- ㉖ 「だに」:副助詞、～でさえ。
- ㉗ 妻の名を呼んで袖を振ったことだ。古代では、名を呼んだり、袖を振るのは、相手の魂に訴えかける行為であった。肉体は死しても、魂は生きているとして呼びかける。
- ㉘ この二首の短歌は、反歌にあたる。「反歌」とは、長歌の後に詠み添えて、その意を反復、補充し、または要約するもので、一首ないし数首からなる。
- ㉙ その山道がわからないことよ。「も」は終助詞、～ことよ。～ものよ。この歌

は妻の死を、妻が自ら山中に迷い込んだものとして描かれた。魂の不滅を思う表現に注意すべし。

⑩「なへに」:～につれて。

5. 山部赤人^①の歌

ぬばたまの^②夜のふけゆけば久木^③生ふる清き川原に千鳥しば^④鳴く

注 釈

- ①「山部赤人(やまべのあかひと)」:生没年未詳。奈良朝前期の代表的歌人。下級官吏として宮廷に仕えていたらしく、行幸に従った作が多く、優美、清澄な叙景歌という新しい境地を開いた。古来、柿本人麻呂とともに歌聖と称された。
- ② 枕詞。「夜」にかかる。
- ③ あかめがしわ、など諸説ある。
- ④ 「しば」:しきりに。

6. 大伴旅人^①の歌

太宰帥(だざいのそち)^②大伴卿、酒を讃むる歌十三首
(うち二首)

駿(しるし)なき^③ものを思はずは一坏(ひとつき)の濁れる^④酒を飲む
べくあるらし^⑤

賢しみと^⑥物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし^⑦まさりたるらし

注 釈

- ①「大伴旅人(おほとものたびと)」(665—731):大伴氏の族長で、家持の父。晩年、太宰帥として筑紫へ下り、山上憶良も交流した。文人的な風流の作が多